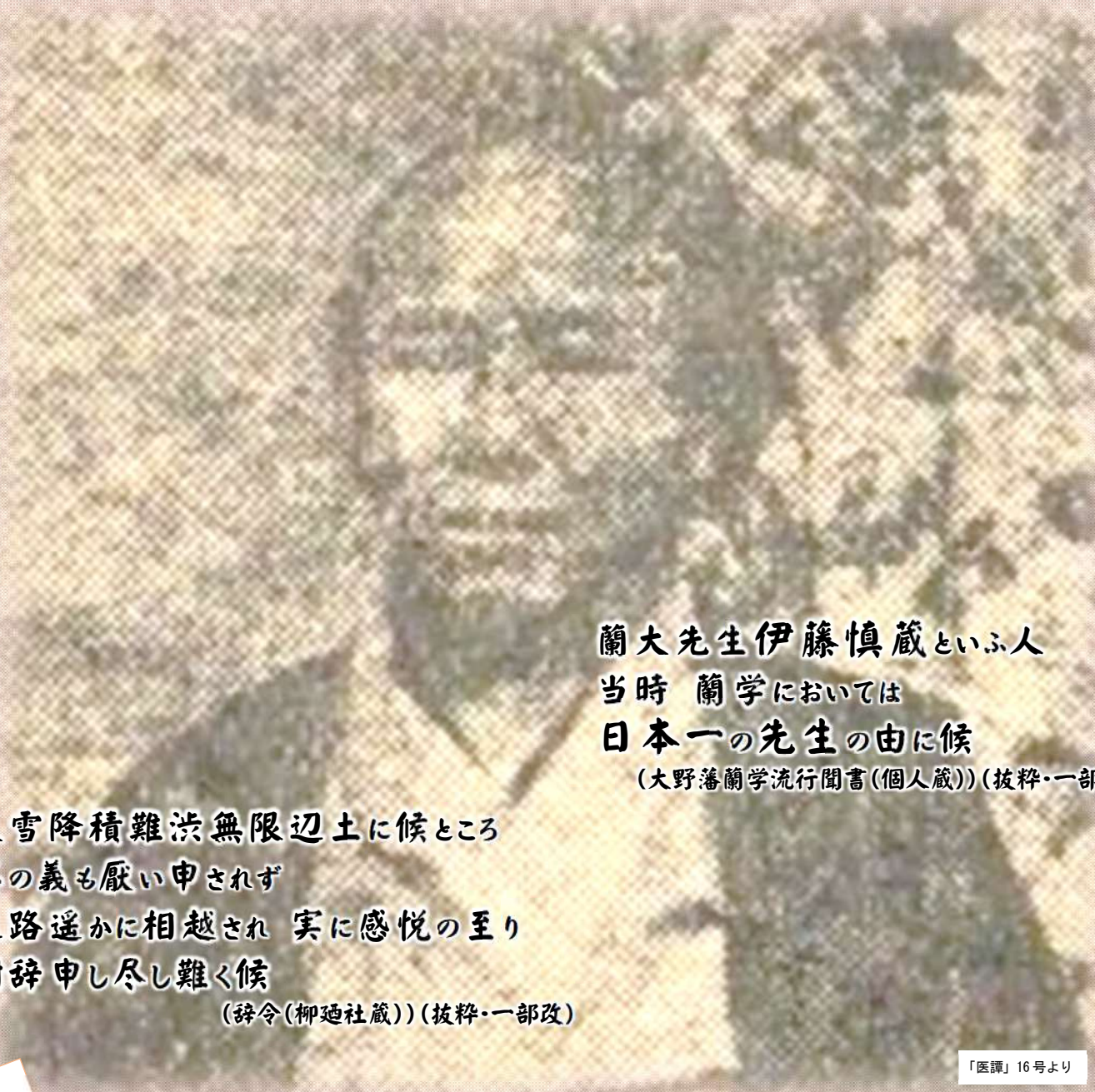
大野藩校洋学館教授・伊藤慎蔵生誕２００年記念企画展

蘭学の牽引者 伊藤慎蔵

Een koploper in de Nederlandse studies

協力：大阪大学適塾記念センター



蘭大先生伊藤慎蔵といふ人
当時　蘭学においては
日本一の先生の由に候
（大野藩蘭学流行聞書（個人蔵））（抜粋・一部改）

大雪降積難渋無限辺土に候ところ
其の義も厭い申されず
遠路遥かに相越され　実に感悦の至り
謝辞申し尽し難く候
（辞令（柳廼社蔵））（抜粋・一部改）

「医譚」16号より

令和7年 5月31日（土） ～ 6月22日（日）

大野市歴史博物館

【大野市教育理念】明倫の心を重んじ 育てよう 大野人

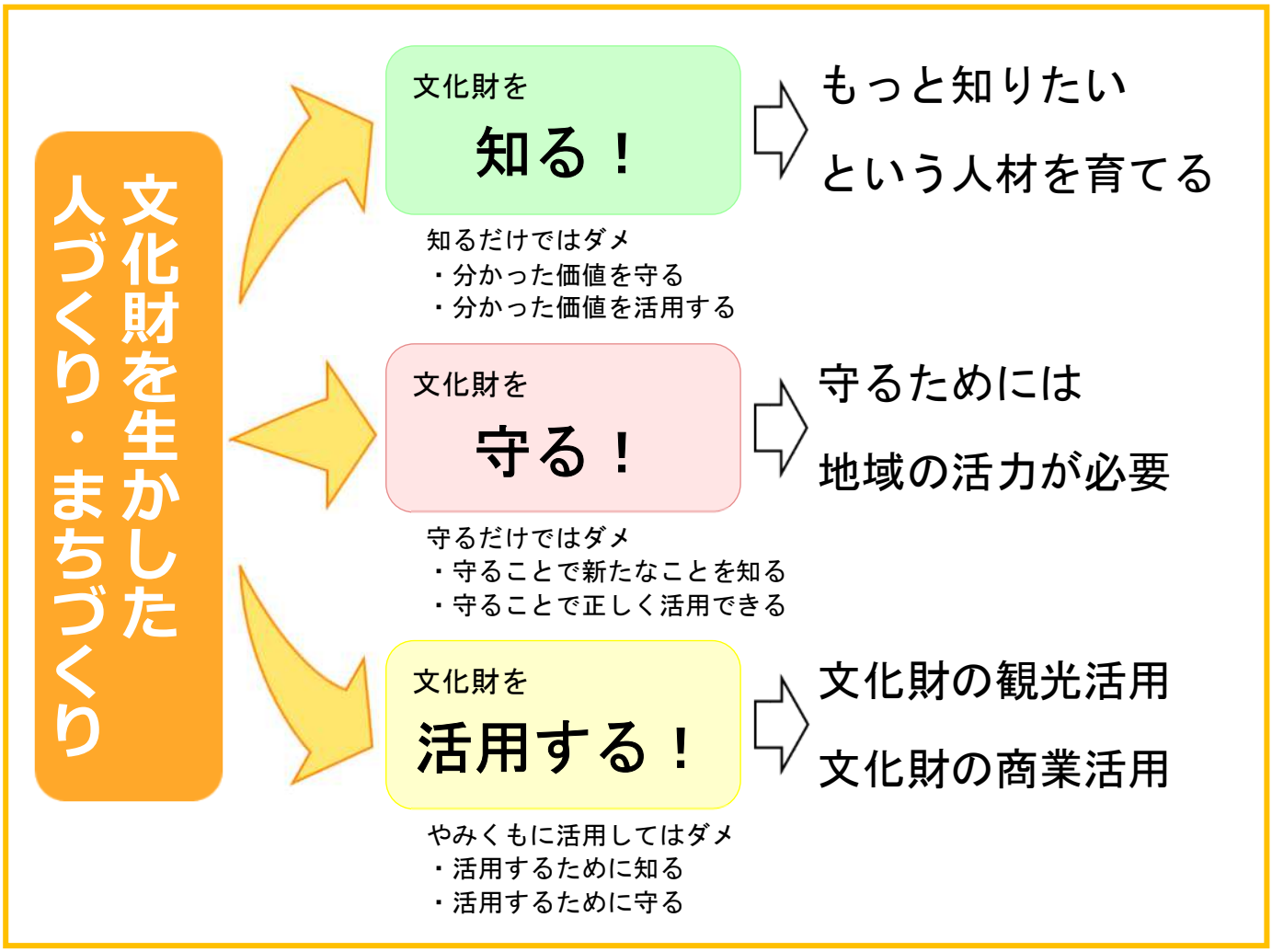
結の故郷 越前おおの

11 住み続けられるまちづくりを

大野市文化財保存活用地域計画

令和４年２月　作成
令和４年７月　文化庁認定

大野市の文化財を適切に保存し、かつ積極的に活用をしようという計画です。



この「 生誕２００年記念　蘭学の牽引者・伊藤慎蔵 」は、「大野市文化財保存活用地域計画」の方針⑤「市民の文化財に対する関心と保護意識の醸成、来訪者が文化財を楽しく知る機会の創出（特別展・企画展の開催）」に対応して開催します。

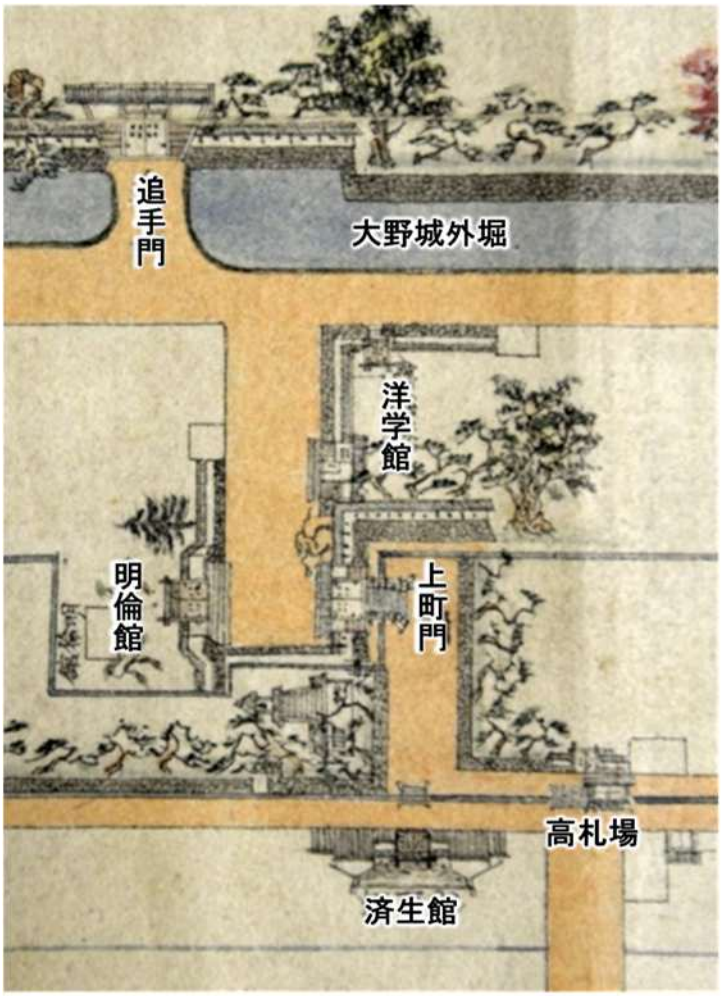
【参考文献】
・『緒方洪庵のてがみ』その二（菜根出版、1980 年）
・『大野市史』用留編（大野市教育委員会、1995 年）
・『大野市史』通史編上（大野市教育委員会、2019 年）
・「三人の藤野先生、その生涯と交流－医家に流れる適塾の精神－」『大阪大学総合学術博物館叢書 22』（大阪大学出版会、2025 年）
・岩治勇一「大野洋学館教授伊藤慎蔵の書翰（藤野家文書附内山家文書）」『奥越史料』第 7 号（大野市教育委員会、1978 年）
・古西義麿「伊藤慎蔵伝をめぐって－名塩時代を中心に－」『論集 日本の洋学Ⅴ』（清文堂、2000 年）

【翻刻協力】
齋藤紀子（大野市教育委員会事務局 生涯学習・文化財保護課 史料調査員）

大野藩と蘭学

天保１３年（1842）、長年の財政難を解決するため、大野藩主・土井利忠は一大改革を行いました。大野藩のこの改革は他藩とは異なり単に倹約にとどまるものではなく、組織を再生させることを目的にしていました。

利忠は天保１４年（1843）、改革のはじまりとして「学校創設の令」を出し、藩校「明倫館」を設置しました。令では、学校を建てる理由を「人として成長しようとするなら、学問以外に方法はない」としており、幼いころから学問を好んだ利忠らしい視点といえます。安政３年（1856）には「蘭学所」（翌年に「洋学館」と改称）を建てて蘭学分野を独立させました。これら藩校は、藩士だけではなく町人も通学を許されました。



明倫館等の位置
大野町絵図（安政５年（1858）以降）（大野市歴史博物館蔵）部分に加筆

これに先立ち、蘭学教授として大坂から招いたのが、適塾の塾頭・伊藤慎蔵でした。

展示資料（参考）

柳陰紀事

時代　明治16年（1883）
所蔵　柳廼社

元藩士・吉田拙蔵がまとめた、土井利忠（大野土井家第７代藩主）の伝記です。天保１３年（1842）から始まる藩政改革の様子が詳細に記録されています。

天保１４年秋、利忠は改革の一歩として、学校を建てました。諭達（大野藩からの通知）で、その理由を次のように説明しています。

徳誼ヲ修メ事理ニ達シ、以テ身ヲ立テント欲ス、斯道ニ由ラスシテ他ニ求ムルノ方アルコトナシ

（人としての道理を修得し、物事の筋道を見極めて、それによって人として成長を遂げようとするならば、学問に拠らなければ、他に方法はない）



伊藤慎蔵

伊藤慎蔵は、文政８年（1825）に生まれました。（※翌年とする説もありますが、本展は文政８年生まれとして開催します）

名は慎、通称は精一、字（学者・文人としての別名）は君独（よみ不明）といいました。「君独」の出典が『史記』孟嘗君列伝「君独不見夫趣市朝者乎」であれば、自分は、孟嘗君を呆れさせた大衆の一員に過ぎない、との意を込めているのかも知れません。名を慎蔵に改めたのは、安政元年（1854）のようです。

慎蔵は、長門国萩藩（山口県萩市）浜崎の町医者・伊藤宗寿の長男として生まれました。嘉永２年（1849）に大坂へ移り、緒方洪庵（医師・蘭学者）の私塾・適塾で約７年間、蘭学を学びました。学力にたいへん優れていたらしく、嘉永５年（1852）には第６代塾頭（塾生の代表者。福沢諭吉は第１０代塾頭）になり、塾生を統括し、学習指導も行いました。

嘉永７年（安政元年・1854）にロシア使節プチャーチンが率いる軍艦ディアナ号が大坂天保山の沖に現われた時には、通詞（通訳）を務めました。



伊藤慎蔵（「医譚」16号より）

伊藤慎蔵の学び舎　適塾

適塾は天保９年（1838）、医者であり蘭学者である緒方洪庵が大坂（大阪市中央区）に開いた蘭学塾です。

かつて適塾で学んだ長与専斎が著書『松香私志』（明治３５年）で、「蘭学を志す程の人は皆此塾に入りて其仕度をなす」と振り返っているとおり、伊藤慎蔵（山口県）のほか、橋本左内（福井市）や藤野升八郎（あわら市）、福沢諭吉（大分県）、大村益次郎（山口県）、箕作秋坪（岡山県）など、全国から多くの塾生が集まりました。

学習方法は一方的に授業を受けるのではなく、会読（数人が集まって同一の書物を読み、内容を研究・議論すること）を中心としたのが特徴で、自由に議論を重ねるこの方法は、日本の近代化に大きな影響を与えました。

適塾は洪庵没（1863）後、幾多の組織改変を経て、現在の大阪大学にいたっています。

緒方洪庵
（画 五姓田義松）
（所蔵・提供 大阪大学適塾記念センター）

適塾（提供 大阪大学適塾記念センター）

住　　所：大阪市中央区北浜 3 丁目 3 番 8 号
開館時間：午前 10 時～午後 4 時
休 館 日：月曜日（国民の祝日の場合は開館）
　　国民の祝日の翌日（土・日・祝日の場合は開館）
　　年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）
参 観 料：一般　400 円
　　高校・大学生等　200 円
　　中学生以下　無料

展示資料１　適々斎塾姓名録（複製）

時代　天保 15 年（1844）～元治元年（1864）
所蔵　大阪大学適塾記念センター

蘭学塾「適塾（適々斎塾）」の入塾者の署名帳です。入塾の順に名前が記されており、伊藤慎蔵は１３８番目に登場します。大野藩からの入塾者は、林雲渓（６４番）、土田龍湾（６５番）、山崎譲（３４５番）、西川貫蔵（３４６番）、滝波元章（４０４番）、田村乙四郎（５９１番）の名が見えます。

伊藤慎蔵の項目には、

> 嘉永２年（1849）２月８日に洪庵に入門し、同３月に適塾に入塾。長州萩藩（山口県萩市）の浜﨑出身で、伊藤精一と名乗っていたのを、慎蔵に改めた。本名は慎で、字は君独、号は長洋。安政２年（1855）１１月から蘭学（の指導）のために大野藩に仕えた。

と記されています。

なお、安政２年１１月から大野藩に仕えたと書かれていますが、正しくは１２月からです。（参考：資料№.２）



適々斎塾姓名録
（伊藤慎蔵部分）

展示資料２　藩庁記録「大野藩に到着」

時代　安政 2 年（1855）12 月 9 日
所蔵　柳廼社

大野藩から蘭学教授として招かれた伊藤慎蔵は、安政２年１２月９日（旧暦）、大野入りを果たしました。大雪のため歩行が困難だったことから、到着予定が遅れたようです。

慎蔵は大野に入ると、一旦、柳町通りの空き家に入って待機し、藩への正式な到着届は、渡辺順八郎（のちの洋学館教授師）を通して行われたようです。

一　内山隆佐御用相済、去月晦日大坂出立伏見ゟ五日振罷候処、雪ニ而歩行滞留相成、九日振ニ而着之旨相届
一　蘭学師伊藤慎三与申者、隆佐同行ニ而着、柳町明屋敷へ止宿為致候処、渡辺順八郎相届、但、右慎三義者大坂医師小形洪庵与申者之弟子ニ而学頭致居候者之由

展示資料３　大野藩蘭学流行聞書（複写）

時代　安政３年（1856）１月
所蔵　個人

安政２年(1855)１１月の村役人の御用留には、藩内の砲術が西洋式に移行されたことにより、経費が増大していることに疑問が呈されています。村部でこういった意見が出ていることから、蘭学推進に対する藩内での疑問はかなり広がっていたようです。

こうした中、大野藩はさらに蘭学を推進させるため、伊藤慎蔵を蘭学教授として招くこととしました。このことについて、当資料では慎蔵を「藪医者の子」としながらも、「蘭学においては日本一の先生の由に候」と、伝聞の形で高評価で紹介しており、藩は事前に慎蔵について説明し、藩内の不安や不満の払拭に努めたようです。

一　近来異国船折々渡来ニ而世上騒敷、日本之諸大名諸芸古薄く
唯砲術而已大流行之由、已ニ当所抔ニ者鑓師範三宅亘、同断
荒川丈右衛門、小太刀師範石川官左衛門、同断小早川湊、太刀師範
関口三郎助、弓師範浅山八郎兵衛、棒術・柔術師範寺島唯右衛門、
鉄砲津田流火縄付也此師範伊藤三大夫何茂潰れ、唯小方元助
といふ人之鉄砲高島流と、剣術内山貝助といふ人之神道無念
流と斗ニ相成、明倫館ニ而蘭学修行流行ニ而、蘭大先生
伊東新蔵といふ人大坂より請　ニ候、此人元出生ハ長州萩之御城
下ニ而藪医者之子之由承り候、尤当時於蘭学ニハ日本一之先
生之由ニ候

展示資料４　藩庁記録「辞令」

時代　安政３年（1856）２月26日
所蔵　柳廼社

藩主・土井利忠の御前において、伊藤慎蔵に辞令が出されました。内容は非常に丁寧で、大野藩を「大雪が積もる、難渋に限りがない辺土（片田舎）」とし、着任を「感悦の至り、謝辞は言い尽くし難い」としています。報酬は、近年の臨時の出費を理由に挙げ、「些少にて気の毒」としながら年俸として１００石を給しています。また、永住するには両親を大野

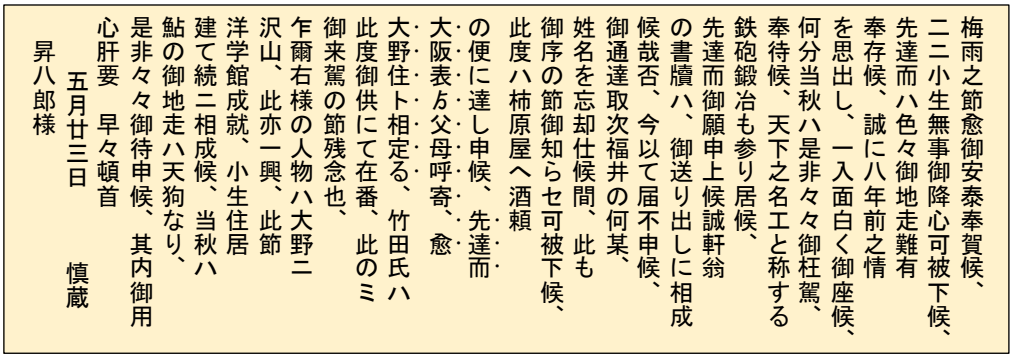
一　於
御前被　仰渡左之通
旧臘厳寒中と申、
殊ニ大雪降積難渋
無限辺土ニ候処、其義も厭不被申、遠路
遥ニ被相越、藩中之子弟とも厚引立被呉候
深意之程、実ニ感悦之至、謝辞難申尽
候、就而は、取扱之致方も可有之候処、近来
海防軍備之用途計も不容易、且去冬
江戸大地震ニ付而は屋敷内建物不残及
大破、其外領内窮民之救方等引続臨
時非常之失費差湊、内外種々差支
之筋有之、万事不住心底ニ折柄、無余
義、甚些少ニ而乍気之毒、召抱候験迄ニ百
石相贈候、猶此末手繰次第ニハ追々深意報
候取扱方も可有之、当時行届兼候義は何分ニも
不肖致被呉、子弟共此上之引立方厚心配給候
様致度、偏ニ頼入候
別段、当所永住給候ニ付而者、両親も被引
移候様致度、就而は彼是失費も可有之、
右為扶助乍些少金五拾両相贈候

に招く必要があるだろうと、その経費に５０両（およそ５００万円ほど）を補助しました。これらから、大野藩にとって慎蔵が待望した人材だったことがうかがえます。

慎蔵の任務は、①蘭学指導（安政３年５月５日から）、②捨次郎（のちの８代藩主利恒）の蘭学指南（７月２９日から）、③所蔵する蘭書の管理（１１月２１日から）、④生徒のとりまとめ（１１月２１日から）であり、蘭学振興の中心を担いました。

展示資料5 藤野升八郎宛て書状「両親を大野へ」

時代　安政３年（1856）５月23日
所蔵　大野市博物館
指定　市指定文化財


梅雨之節愈御安泰奉賀候、
二二小生無事御降心可被下候、
先達而ハ色々御地走難有
奉存候、誠に八年前之情
を思出し、一入面白く御座候、
何分当秋ハ是非々々御枉駕、
奉待候、天下之名工と称する
鉄砲鍛冶も参り居候、
先達而御願申上候誠軒翁
の書牘ハ、御送り出しに相成
候哉否、今以て届不申候、
御通達取次福井の何某、
姓名を忘却仕候間、此も
御序の節御知らセ可被下候、
此度ハ柿原屋へ酒頼
の便に達し申候、先達而
大阪表ゟ父母呼寄、愈
大野住ト相定る、竹田氏ハ
此度御供にて在番、此のミ
御来駕の節残念也、
乍爾右様の人物ハ大野ニ
沢山、此亦一興、此節
洋学館成就、小生住居
建て続ニ相成候、当秋ハ
鮎の御地走ハ天狗なり、
是非々々御待申候、其内御用
心肝要　早々頓首
五月廿三日　慎蔵
昇八郎様

かつて大坂の適塾でともに学んだ、越前国坂井郡下番村（現・あわら市）の在村医・藤野升八郎（昇八郎とも）に宛てた私信で、このころ、両親を大坂から大野に招いたことが報告されています。

大野藩は、伊藤慎蔵が着任した当初（２月末）から、両親を招き寄せることを前提にしていました（資料№４）。３か月を要したのは、このころ洋学館の建物が完成し、慎蔵の住居の目途も立ち、迎え入れる準備が整ったためと思われます。

展示資料6 藩庁記録「平三と四郎の入学」

時代　安政３年（1856）６月30日
所蔵　柳廼社

緒方洪庵の子・平三と四郎は、洪庵の指示に従い、加賀大聖寺藩の渡辺卯三郎のもとで漢学を学んでいました。ところが大野藩が伊藤慎蔵を招いたことを知ると、兄弟（当時１３歳と１２

歳）は無断で渡辺の塾を抜け出し、大野藩に来ました。大野藩到着の日付は不明ですが、平三（のちに惟準）の自伝「緒方惟準先生一夕話」に「竊かに大聖寺を去り深雪を侵して大野に赴き」とあり、故岩治勇一氏は安政３年２月のこととしています。

大野藩は、この兄弟の突然の来訪には困惑をしたようで、洋学館入学の手続きには４か月を要しました。この間の詳細な記録は残されていませんが、慎蔵が入学手続きを行い、入学時に洪庵の妻の弟・億川翁助が慎蔵の手引きで来藩していることから、２人が協力をして兄弟をサポートしたようです。

一　伊藤慎蔵方へ億川翁助と申者罷越逗留
為致度段、順八郎を以相願、例之通及挨拶
一　同人方江大坂師匠緒方洪庵悴両人罷越、当
分学文修行為致度段届有之
緒方平三
同　四郎

展示資料７

内山良休宛て緒方洪庵書状

「平三・四郎の勘当」

時代　安政３年（1856）11月２日
所蔵　個人

緒方洪庵の子・平三と四郎は大聖寺藩で漢学を学んでいましたが、伊藤慎蔵を慕い、無断で大野藩にやって来ました（資料№６）。

慎蔵からの知らせでこの勝手な行動を知った洪庵は怒り、内山七郎右衛門良休（大野藩年寄、のちに家老）に宛てた書状で平三を「豚児」と呼び、２人を勘当しました。

当初からこうした洪庵の怒りを予測したであろう大野藩は、２人の入学手続きに４か月を要し、洪庵に通知したのは、さらに４か月を経てからでした。その間、良休と洪庵の交流もあ

一書拝啓仕候、向寒之
節御座候処、先以益
御多祥被成御起居、欣然
之至奉恐賀候、扨先頃御
登坂之節は態々御尋訪
被成下、殊に結構之御土産
御恵投被成下、千万難有
仕合奉存候、其後御旅宿へ
一応拝趨御礼も可申上と乍奉存、
風邪等ニて彼是延引仕候内
御帰国ニ相成、可申訳次第
重重失敬之至奉恐入候、然は
慎蔵より先月廿四日出之書状
差越、今二日相達し候処、豚児
平三事四郎と申合せ、謀計
ヲ以て御地へ罷越候趣、若輩
之身を以て大胆不敵之至、
不届至極奉存候ニ付、即刻
慎蔵へ委細之返書差遣し、
両人共勘当申付申候、巨細之義は
慎蔵へ申遣候間、御聞取可被遣、
同人より御相談申上候義も御座候ハバ、
重々恐入候へ共、可然御示揮
被成遣度御願申上候、右時候
御伺ヒ旁任幸便萬々如此
御座候、万々奉期後鳴候　恐惶謹言
十一月二日　緒方洪庵
内山七郎右衛門様
尚々時気千万御自嗇被成度
奉祈候、荊妻よりも宜ク申上候様
申出候、以上

りましたが、２人のことは触れておらず、大野藩は対応を十分に検討して、兄弟を迎え入れたのでした。洪庵は、大野藩の姿勢を読み取ったのか怒りを和らげ、勘当中に良休に宛てた他の書状では、２人が世話になっていることの感謝を伝えています。

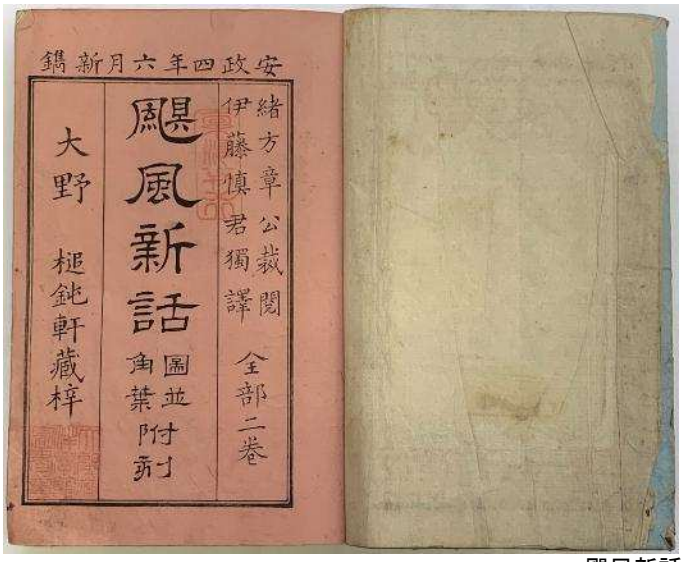
展示資料８　颶風新話（ぐふうしんわ）

時代　安政４年（1857）
所蔵　柳廼社

－内容－

伊藤慎蔵（いとうしんぞう）の大野時代の功績のひとつに、「颶風新話」の翻訳・出版があります。

「颶風」とはハリケーンのことで、航海用気象学書です。イギリス人・Piddington（ピディントン）の著書（1852）をDelden（デルデン）がオランダ語に翻訳（1853）したものを、安政４年（1857）に慎蔵が日本語に翻訳しました。Piddington（ピディントン）の原題「ハリケーンに関する会話」（日本語訳）とあるとおり、当時としては珍しく、対話形式（口語体）で記されています。



颶風新話

当時は新たな学問分野であったことから、わかり易く説明しており、Piddington（ピディントン）は「想像できる限り最も平易な言葉と最も馴染みのある例えを用いる」（日本語訳）とし、慎蔵も「この本は船員が実際に使用することを目的としている。そのため言葉遣いや翻訳の精確さにはこだわっていない。支障がないものは、一般に聞きやすい言葉を選んだ」（現代語訳）としています。

こうした方針は、大野藩の、実際の役に立てさせるために学問を修めようとする「実学主義」に沿うものでした。

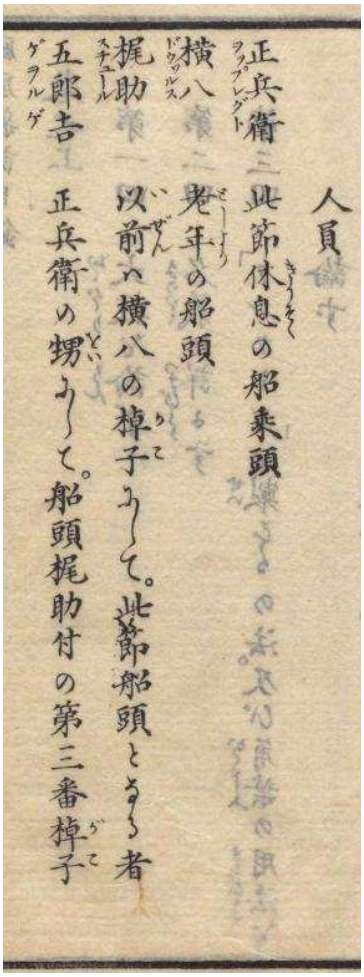
－新知識への抵抗への抵抗－

内山隆佐（うちやまりゅうすけ）による跋文（ばつぶん）によると、颶風新話の内容が新し過ぎたことから、伊藤慎蔵（いとうしんぞう）はかなり誹謗を受けたようです。こうした新知識への抵抗はPiddington（ピディントン）の原著発刊時にもあったようで、

扉にはフランシス・ベーコン（1561～1626、イギリスの哲学者）の「学問の進歩(The Advancement of Learning)」の一節が記され、新知識の導入・普及の苦労が引用されています。

颶風新話の中でも正兵衛（しょうべえ）が伝えようとする新知識に抵抗する人物が登場します。老年の船頭・横八（よこはち）です。横八に該当する人物の名は、原著では「Wrongham（ロンガム）」で、名に「wrong」（誤り）が含まれています。蘭書では「Dwars（ドゥワルス）」と変わりますが、これは「横切る」や「間違った考え」という意味があります。

古い知識や経験にこだわり、新知識を退けようとする者を（誤り）wrongと表現するPiddington（ピディントン）の思いは、Delden（デルデン）によって（間違った考え）dwarsとして受け継がれました。この人物の和名を「横八」としたのは、dwars の「横切る」の意味を採用したためと思われ、慎蔵のオランダ語に対する高い理解力や応用力の一端を知ることができます。


人員
正兵衛（ラップレグト）
此節休息の船乗頭
横八（ドゥワルス）
老年の船頭
梶助（スチュール）
以前ハ横八の梶子（ロル）ゐて。此節船頭とゐる者
五郎吉（ゲラルゲ）
正兵衛め甥（オム）ゐて。船頭梶助付の第三番梶子（ガド）

颶風新話（部分）

－出版－

版元の「槌鈍軒（ついどんけん）」は、慎蔵の号です。同じ年に大野藩が出版した「英吉利文典（いぎりすぶんてん）」（英語の文法書）には「大野文庫蔵版」と書かれているので、颶風新話が慎蔵個人によって出版されていることが分かります。

出版はスムーズにはいかなかったようで、友

芳書難有拝見仕候、其後
愈御清適被遊御起居
芽出度奉存候、二二草堂
一同無事、乍憚御安襟
可被下候、此度ハ乍毎度御態
人被下、結構之新鮮魚
御恵投、早速拝味仕、千万
難有仕合奉存候、且亦ビス
トール一件、実ハ先達而も
及催促候得共、所詮都合
出来兼候由、今晩亦々申遣、
即別紙答書之通ニ御座候
ニ付、暫時旧銃差上置候、
代料ハ答書ニ有之通ニ付、
出来之節可申上候

一　郁先生死去之説ハ、定而虚

説にて可有之と被相考候、已ニ
両三日前到来有之候得共、
為何沙汰も無御座候

一　アメリカへ之御使節、中途
にて引戻され候も聞及不申
候間、実否相分り不申候

一　本間清一郎と申者ハ、如何
之者ニ御座候哉、先達而弊地
にも浪士壱人通行いたし
申間、右之者共にてハ無之候哉
甚以軽少恥入候得共、山芋
壱本呈上仕候、実ハ今少シ差
上度候得共、今晩折節何
れも払底仕候間、不悪思召
可被下候

一　兼々御約束仕候颶風新話
今以延引、甚以恐入候次第ニ
御座候、実ハ忘却仕候ニハ無
之候得共、人頼之上ニ俗吏
相手、毎々間違斗、乍爾
此節も頻ニやかましく
申遣し置候事ニ御座候、此も
元トノ悪本ならは、只今にても
此方ニ取寄之分御座候得共、校
正之分と相考心配仕候
御使へ被仰聞候牛首つむき、
帯地・いと口幷ニきぬ糸ハ
今晩調兼候付、私方ゟ後
便心配仕候而差上可申候

一　鉄ヒストールハ毎々御手入肝要
ニ御座候、左候ハてハ直にさび
を生し甚タ見苦敷相成
申候、先ハ右用事荒々、
其内時候御保養肝要
奉存候　早々頓首

閏三月念五　　慎蔵　拝

藤野盟兄
梧下

展示資料（参考）藤野升八郎宛て書状「颶風新話の出版の遅れ」
時代　安政５年（1858）閏３月５日
所蔵　大野市博物館
指定　市指定文化財

人の藤野升八郎に宛てた書状で「俗吏（大野藩士）を相手にしており、いつも校正が間違いばかりで、しきりにやかましく申している」と愚痴を伝えています。

－評価－

颶風新話は安政４年（1857）に発刊されると、翌年には出島のオランダ商館長ヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルティウスによって収集され、約１００点の日本書籍群とともにオランダ政府に購入されました。これら書籍群は、1882 年にライデン大学のヨハン・ヨーゼフ・ホフマン日本語学教授によって目録化されますが、颶風新話は翻訳の簡潔さに加え、内山隆佐の跋文を紹介しながら、日本における西洋文化の受け入れの様子がわかるとして、たいへん高く評価されています。

N°. 36d. 〽颶風ヲノ新話ヲ *Gu-fû sin-wa* of *Mavi- mavi-kazeno sin-wa*. d. i. Het nieuwste over Cyclonen, (uit het Nederlandsch) vertaald door 伊藤愼君 Itô Sin-kun, geredigeerd door 織方章公 Ogata Syô Kô, en met afbeeldingen en kaarten uitgegeven in het 4de jaar Ansei (1857). 2 deelen.

Het werk, waarvan hier eene uitmuntende Jap. vertaling gegeven is, heeft den titel: »Gesprekken over orkanen. Eene duidelijke en vatbare handleiding voor den zeeman, om niet alleen alle ronddraaiende stormen te leeren vermijden, maar ook om er dikwijls voordeel van te trekken voor het opzoeken van een gunstigen wind. Door Henry Piddington. Vrij [maar al te langdradig] uit het Engelsch vertaald door S. van Delden Az., Oud-Koopvaardijkapitein om de Oost. Te Amsterdam bij C. F. Stemler. 1853."

De Japansche vertaler, die, het zij ter loops gezegd, minder langdradig dan de Nederlandsche is, geeft in zijne inleiding eene verklaring van de Hollandsche scheepswoorden, die hij onvertaald heeft overgenomen, en lettergreep voor lettergreep door Chineesche karakters of door Katakana heeft uitgedrukt. Onze scheepswoorden zijn mitsdien in de Jap. taal ingelijfd, en de Jap. zeeman zal op

本文は漢字とひらがなで印刷され、オランダ語の単語は外国語としてカタカナで表記されている。著者は漢字に日本語の読み方を加えたため、読者は十分に表現されたテキストを読むことができる。この作品は日本語研究への歓迎すべき貢献として考慮されるに値する。

西洋の科学が日本でどのように受け入れられているかを示すために、序文の冒頭部分の翻訳をここに掲載することは不適切ではないだろう。著者はこう述べている。

「昔は役に立っていたのに、今は役に立たないものもある。今は役に立たないものでも、いつか役に立つものがある。一昔前なら、海外で砲兵や科学研究に携わる者は世間から無用とみなされ、嘲笑されることさえあった。では今はどうだろうか？ 帝国の辺境の地でさえ、こうした人々は尊敬を集め、将軍は彼らを召集し、大名たちは彼らを探し出すためにあらゆる努力を払う。かつては世間から無用とされていたものが、今では役に立つのだ。自らが生きる世界の成り行きを観察する政治家は、時の力によってもたらされる変化を見逃してはならない。」

»gehouden, en die heer wilde het daarom niet door den »druk uitgeven. »Maar," zeide ik, »zien wij thans niet in »onze zeeboezems Japansche schepen met twee en drie mas»ten, die gebouwd en getuigd zijn evenals de vreemde sche»pen, en die ver buiten den zoom der wolken gezonden »worden, waar ze nieuwe, nog onbekende vaarwaters be»zeilen? De schepen zijn er; en zoude nu eene kunst om »zee te bouwen niet lezenswaard zijn? Men kan immers niet »weten of datgene, wat de menigte van heden voor onnut »verklaart, niet in de toekomst nuttig is! Hoe ging het met »de overzeesche kanonnen en de overzeesche wetenschappen? »Vroeger voor onnut verklaard, worden ze thans voor nuttig »gehouden. Is het nu zaak zich om den spot der menigte te »bekreunen en ook deze zaak — de leer der orkanen — ge»heim te houden?" De schrijver van het voorbericht de heer Utsiyama Roriu van Ohono besluit met de kennisgeving, dat hij den heer Itô tot de uitgave van het werk heeft overgehaald, terwijl een arts een gedeelte der kosten heeft op zich genomen.

Door de aangehaalde tirade van het voorbericht, dat voorzeker noch met een diplomatiek oogmerk, noch voor het buitenland geschreven is, wordt een opmerkenswaardig feit geconstateerd. Niet aan den volksgeest, die, aan het oude

西洋の芸術や科学が日本にもたらされたのは、古いものに執着して回帰を望み、外国を軽蔑する民衆の精神によるのではなく、前進を目指す大君の啓蒙的な政府によるものである。

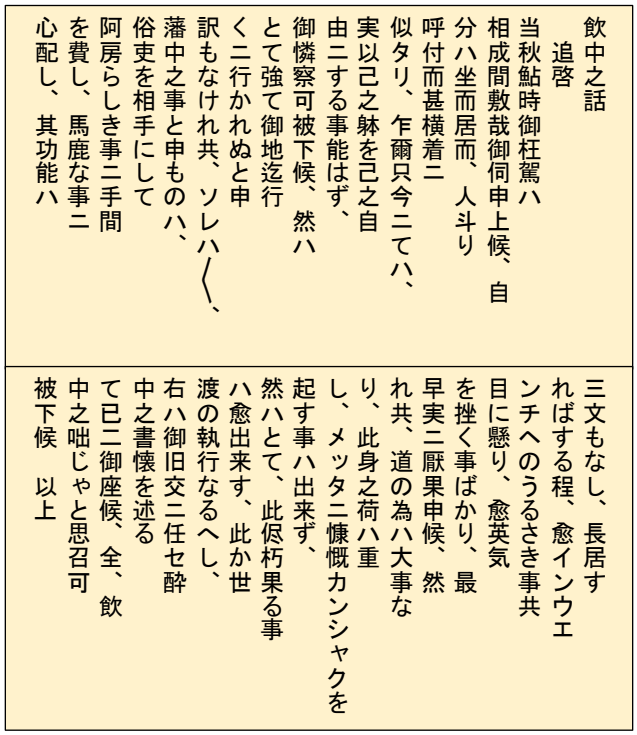
ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン「Verzameling van Japansche Boekwerken」（日本書籍目録）
Open JSTOR Collection（https://www.jstor.org/stable/25739616）

展示資料 9　藤野升八郎宛て書状「飲中之話」

時代　不詳
所蔵　大野市博物館
指定　市指定文化財

伊藤慎蔵と藤野升八郎（現・あわら市の在村医）は、適塾の塾生時代から気心の知れた仲だったようです。

慎蔵は不慣れな仕官生活を窮屈に思うことが多かったらしく、「飲中」（酒を飲んで酔っている）と前置きをしてから「藩の役人を相手にして阿房らしい事に手間を費やされ、馬鹿な事に心配をし、この効果は三文の価値もない。長居をすればするほど、いよいよインウエンチへ（内部）の煩わしいことが目にかかるようになり、ますます英気を挫くばかりで、もはや実に嫌になっている」と、不満を隠すことなく漏らしています。



飲中之話
追啓
当秋鮎時御枉駕ハ
相成間敷哉御伺申上候、自
分ハ坐而居而、人斗り
呼付而甚横着ニ
似タリ、乍爾只今ニてハ、
実以己之躰を己之自
由ニする事能はず、
御憐察可被下候、然ハ
とて強て御地迄行
くニ行かれぬと申
訳もなけれ共、ソレハ〳〵、
藩中之事と申ものハ、
俗吏を相手にして
阿房らしき事ニ手間
を費し、馬鹿な事ニ
心配し、其功能ハ
三文もなし、長居す
ればする程、愈インウエ
ンチへのうるさき事共
目に懸り、愈英気
を挫く事ばかり、最
早実ニ厭果申候、然
れ共、道の為ハ大事な
り、此身之荷ハ重
し、メッタニ慷慨カンシャクを
起す事ハ出来ず、
然ハとて、此侭朽果る事
ハ愈出来す、此か世
渡の執行なるへし、
右ハ御旧交ニ任セ酔
中之書懐を述る
て已ニ御座候、全、飲
中之咄じゃと思召可
被下候　以上

展示資料 10　藤野升八郎宛て書状「両親の帰坂」

時代　安政４年（1857）12 月 13 日
所蔵　大野市博物館
指定　市指定文化財

安政４年（1857）の秋、伊藤慎蔵の両親は大野の寒さに耐えかねて大坂に戻ってしまいました。大野に呼び寄せてから（資料№５）、わずか１年半ほどの滞在でした。このことをきっかけとして、慎蔵の大野藩に対する心境に変化が起きたようです。

文久元年（1861）５月に慎蔵の父・宗寿が亡くなりました。慎蔵は残された母（継母・宗寿の後妻・砂子）の介抱のため、同年８月２７日に「当分之内」として大坂へ行くことを許されました。

慎蔵は継母の死去後も大野へ戻ることはありませんでしたが、大野藩は俸禄を渡し続け、慎蔵は、他藩に仕えることはなく、自身の近況を大野藩に報告していました。それによれば、続けて家族が亡くなっており、幸せな生活ではなかったようです。

芳書難有拝見仕候、愈
以御安泰扑喜仕候、二二
草堂無変罷在候間、此
段御降心可被下候、此度ハ
態人被下、結構之品数々
御恵被下、難有仕合奉
存候、乍毎度御礼之申上
様無御座候、被仰下候扶
氏遺訓之義ハ、出来次第
一部宛参候事にて、師家
ゟ尊兄へ呈上仕候訳に
御座候得者、代料御遣シに
及不申候、新話之義ハ、先
達而上木ハ仕候得共、其
節人任せに仕置候事ニ
候得者、誤謬沢山ニ付、
此度再校正仕候間、校
正本出来次第差上可
申候、遺訓附録之義
ハ、早速太阪表へ可申
遣候間、左様御承知
可被下候、青木ノヘルケン
ニンク同断御座候、今以
御宿痾荏苒之由、御
気之毒千万、何卒
来春にも相成候ハヽ、御保
養旁御登阪にて、
華陰メース共御相
談之義可然哉と奉
存候、小生方にも、親共
北国之寒気に堪兼候
訳も有之、音以当秋
ゟ登阪為仕、緒方之
近所、裏屋ニ住居為仕候、
右ニ付小生も十一月
十日出立にて登阪、同
廿八日帰郷仕候、右ニ付
独身にて公私之用
向紛紜、困入申候、
軽少之品に御座候得共、
猪肉・わさび少々呈
上仕候、御笑留可被下候、兎
ハ色々心配仕候得共、頓ト
手に入不申、後便差
上可申候、何卒巳来ハ
過分之御進物等
御断申上候、全ク品もの
を以交り候訳にハ無御座候
ニ付、御気之毒千万
之至御座候、主侯も来
七月にハ帰国、旁以諸
稽古も賑候訳ニ御座
候間、八月鮎時分御
保養旁御曳杖
奉待候、常ニハ御承
知之通山地、御地
走も無之、御気之毒のミ
ニ御座候、常達焼、又々
御送被下、一ト品頂戴仕候、
嘸々御心配之義と奉察候、
最早十分ニ御座候間、此
上御心配及不申候、金弐
百匹御送り被下落手
仕候、扶氏附録とヘルケン
ニングノ代料差引、後
便御返却可申上候、内
山へ御進物早速相届
申候、緒方小供へ乍毎度
難有奉存候、橋本左
内之話、先日大阪にて
始て承り驚入候事に
御座候得共、頓ト実談難
承、水府公之談も道中
雲助之話位之事、
一切相分不申候、乍尓京・
摂間ハ御取締至て厳
重之事ニ御座候、頂戴之
ブリハ至而結構にて、
此節之独身、酒之肴
に大仕合仕候、先ハ右貴
答迄荒々申上候、其内
時気御保養肝要
奉存候、　早々頓首
十二月十三日　慎蔵
拝
藤野盟兄
御侍史

【 附録１ 】伊藤慎蔵年表

文政８年（1825） 誕生
嘉永２年（1849） ２月８日、緒方洪庵に入門
３月、適塾に入塾
嘉永５年（1852） 適塾の塾頭（6代）になる
嘉永６年（1853） ７月１日、「不埒の事」があったとして、適塾を破門される
嘉永７年（1854） ２月、大村益次郎（当時は村田蔵六）の仲介により、破門を許される
名塩村（兵庫県西宮市、洪庵の妻・八重の出生地）の紙漉屋木戸六三郎の娘・鹿子と結婚
安政元年（1854） ９月、ロシア使節プチャーチンの天保山来航時に通詞を務める
安政２年（1855） 大野藩に招かれる
12月９日、大野藩に到着
12月10日、藩主・土井利忠に目通りを許される。藩庁記録では「蘭学師」と肩書される
安政３年（1856） ２月26日、辞令が交付され、俸禄は100石となる
２月ごろか、伊藤慎蔵を慕い、緒方洪庵の子・平三と四郎が大野藩に到着
５月23日より前、大坂から両親を招く
６月30日、平三と四郎の洋学館入学の手続きを行う
７月29日、捨次郎（のちの8代藩主・利恒）の蘭学指南になる
安政４年（1857） ６月、「颶風新話」を出版する
12月13日より前、両親が大坂に戻る
安政６年（1859） 春、「築城全書」を翻訳
文久元年（1861） ５月、父・宗寿が亡くなる
８月、継母・砂子の介抱を理由に大野を離れ、大坂に移る
９月ごろか、長女・小ふじが亡くなる
12月２日、妻・鹿子が亡くなる
文久２年（1862） ４月、名塩の紙漉屋木村新右衛門の娘・時子と再婚
秋、時子の養生のため、名塩に移る
このころか、名塩で洋学塾を開く
文久３年（1863） ５月26日、長男・小一郎（鹿子との子）が亡くなる
11月７日、女子・御代が生まれる
慶応元年（1865） ３月、時子が亡くなる
７月10日、継母・砂子が亡くなる
11月、摂津国昆陽村（大阪府伊丹市）の医師・小松元辰の娘・貞（友子）と再婚。億川家（緒方洪庵の妻の実家）から五郎（小三郎）（安政５年生）を養子（明治８年に離縁）に迎えたのち、芳子（芳児）（慶応３年生）・小五郎（明治３年生）・七尾（明治７年生）・くめや（明治８年以降）の子に恵まれる
慶応３年（1867） 春、「改正　磁石霊震気療説」を発刊
秋、「筆算提要」を発刊
慶応４年（1868） ４月２日、貢士（公議機関の議事官）に任命される
明治２年（1869） ４月、神戸洋学伝習所（兵庫県）の教授職になる
明治５年（1872） ６月までに、大阪開成所の文部大助教（数学担当）になる
８月、東京に移る
９月５日、工学寮（工部省の中に設置された技術者養成部局）に勤める
明治６年（1873） 10月３日、工部省に勤める
明治７年（1874） ２月２日、工部省を退職
明治13年（1880） 脳溢血のため55歳で死去

【 附録２ 】颶風新話　巻之上

第一回　大論を論ず

横八　当時の世の中でハ。ものがそのやうに旨くハ行かぬものじや。先頃までわしの棹子であつた梶助ハ。（若イ時からわしと一所に船を乗あるいて。地球の向ふ側までも行く事の十分出来る男じやから。わしも彼れとなら大丈夫どこまでも行ふと思ふて居る位じやが）兼て「ストルム」の「ウェット」を習ひたがつて居たけれど。中々教て貰ふ事が出来なんだ。それからあの西印度の「ヲルカーン」のあつたのて。何かまた人が。新板事を案じ付た様子じやが。あれハ全体何事じやしらん。正兵衛さんおまへよくしつてござるが。わしにチトいふてみさつしやる事が出来ぬか。五郎吉貴様ハしらぬか。いつでも

貴様ハをぢさんの書物をよく嗅ぎつけて居るが。あの新板事ハ一体何といふ名ぞへ。

五郎吉　親方あの新学問ハ。たしか「シクロノギー」【颶風学の義】といふてあつた事もあるかと思ふて居る。

横八　これハまためつぽうにいひにくい名じやノヲ。そしてまたそふ笑たり。そんなにをれの顔を見たりせずと。貴様達の内に。あの可愛そうな梶助が。あんなたわけ学問に迷はされぬためにハ。何を習ふたならよいか。しつて居る人があるか。

正兵衛　横八貴様ハ。その訳を聞たい気なら。一体心得がわるいぞや。

横八　それハマアそんなものじやけれど。あの可愛そうな梶助が。教へて貰ふ事の出来ぬのハ。実に憐むべき事じや。全体人ハ。自分の職分に関るだけの事を。何もかもミなしらぬ。といはれてハ恥かしい事じやから。わしまで彼れの事を残念に思ふ。その上あの梶助ハ。わしの通りに船の飯を喰て育ち。わしの仕込で。あの様な船乗になつた上。正しいよく出来た男じやから。真底から可愛そうでならぬ。そしてまた一体わし共の様な年寄た船乗が。そんな新学問を人並に知て居よう。と思ふ人もあるまいし。元より人もわしも信仰せぬ学問の事なら。尚もつてそふ思ふ人ハあるまいがの。ヤレ/＼仕合せな事ハ。此学問の世に出る前に。此慥な証文を取てをいた。それでないと。わしもやはり迷はされるのであつた。

正兵衛　マア横八こつちへこい/＼。貴様やをれ共より余程上手な船乗や学問した人が。相違ないといふてシッカリ極て置た事を。貴様ハゑらふごてもちいふ。そして貴様ハ。此学問をする人達が。此学問の事を穿鑿するのハ。心得違じやと思ふて居るなら。それハ貴様の心得が間違といふものじや。そして其人の内にハ。をれの友達もあるが。一体心得違と知て。心得違をする人ハないものぞや。貴様が随分辛抱してきく気でさへあるなら。其人達の心得違でない訳を。をれがチョットいふてきかせう。

横八　ヤア/＼おまへまたわしを吟味しかけるのか。爾し此青二才の前で。わしのつまらぬ事を。丸出しにやつて貰ふてハならぬ。そこはチット考て下され。そして梶助にも一所にきかしてやりたいものじや。そしたなら彼れも益を得る事じや。ヤア丁度そこに来をるハ。ヲイ梶助。マアチョットこゝへ尻をすへや。アノ貴様が教へて貰う事の出来なんだ新学問を。二人ながら無価きかれるハ。サア正兵衛さんハ講釈台へ上らしやつたぞ。そして貴様と一所に旅へゆく三番棹子の五郎吉も。気を付てきけバ随分覚えられる事じや。爾しながら正兵衛さん。わしハこれまで「ストルム」や「ヲルカーン」にハ度々逢ふたから。「ベイダラーイエン」より別に無難に乗り通る法が色々あるといふて。だまくらかそうと思はしやつても。そうハゆかぬぞへ。そして梶助。それハミな古い船乗のしをつた事で。たとへ貴様が此新学問を習ふとも。やはりその通りに扱はねバならぬ。といふ事を忘れまいぞや。

正兵衛　フンそれなら。これよりチト話さう。しかしまづ始に。をれが友達の此学問をする人が。此学問の事を穿鑿するのハ。心得違でないといふ証拠を見せておかねバならぬ。五郎吉チョット其「ヒルギリユス」【人名】の書をとつてくれ。

横八　それがこゝに何の益にたつか。

正兵衛　其訳ハ今直にわかる。サアこれを見や。こゝに

“南星ト極星ノ光リヲ見テ
力ヲ尽サバ。「シヘリア」【地名】ノ岸頭モ遠シトセズシテ
漕ギ至ルベシ”

とあるが。これハ元「ヒルギリユス」が。「トロイエン」【地名】の古人の説を取て書たので。これを見れバ。此時代にハ。羅針なしに船を乗たものとみへる。それから此書著述の後千三百年余たつて。始て羅針が世に出て。追々陸地の見へぬ所へ。船をのりだす事が出来。それより段々天文の学問によつて。日や月や星を測つて。船をのり始めたによつて。四百五十年程の間。「アストロラビユム」「ガラードストック」「ガラードボーグ」抔いふ道具をもつて。船ののり筋を知りをつて。「ダラケ」「カヘンヂス」「ダムピール」【並に人名】抔も。ミな此道具でのり筋を取て。地球のまはりをあるきおつた所が。其後「ハデレイ」といふ船乗が。始めて反射「ヲクタント」といふ余程便利な道具を拵へ出した。即ち此節の結構な道具ハ。ミなそれからして追々成就しあげたもので。中でも「アフスタンドメーテル」「テイドメーテル」「バロメーテル」抔ハ。真の近頃出来たもので。「バロメーテル」の用ひ方の一番古ふ出た書が。紀元千七百九十七年の著述位な事じや。

横八　なるほどそれハそうじやが。正兵衛さんそんな事が。此事の穿鑿をする人達が。「ストルム」の「ウェット」と名付る其新製学問の事を。梶助が知らぬといふて尤める筈といふ証拠にどうしてなるか。

正兵衛　サア其訳ハ。横八今いふてきかせるが。そして貴様が。其人達の其学問の事を穿鑿するのを心得違といふのハ。其穿鑿事を貴様の信仰せぬーツの新学問に仕立るのが。心得違といふ積りか。

横八　そうじや。おまへのいはつしやる通り。

正兵衛　それなら貴様。昔の星ばか

りを目度にして船をのりをつた船乗が。始て羅針を用ひた人を。ゑらい阿房な奴等じや。と思ふたといふ事を考へてみや。貴様が丁度それと同じ事じや。そして其船乗が阿房な奴等が鋼鉄の針に何やら黒い石をすり付て。それで古代の船乗よりよくのり筋を知るなどいふて。鼻を高うして居る。といふて笑ふたであらう。そしてまたいつまでも「ガラードストック」ばかりを用ひて居る人が。余人の難船したを見て。「ヲクタント」をやらいふとつけもない遊道具や。益にもたたぬ円い地図を用ひるから。あんなめに逢ふたなどいふのはどうじや。それから追々後になつて当期の始め。をれ共の小供の時の事を思ひ出してミると。「アフスタンドメーテル」や「テイドメーテル」や「バロメーテル」が世に出た所が。なにが茶瓶頭の船乗たちが。「コーク」【人名】が已に「アフスタンドメーテル」や「テイドメーテル」を用ひたといふ事ハ知らずして。頻りにわるくいひ立たじや。そこで此船乗たちが。昔の人ハ船のほんとうの居場所を知る此新法を知らぬといふて。わる口いはぬからわるいといふのでハない。只々羅針が世に出て。星を見てのり筋を知る事を。脇の方へおしやり。「アフスタンドメーテル」や「テイドメーテル」が世に出て。不慥に「ベステッキ」をしをつた事をバ。海の中へザンブリなげこんだ時に。自分の古癖を捨て。新しい事を取らなんだのが。素性のわるい処で。只昔わからなんだ事が少しわかりかけて。まだ学問とも何ともわからぬ些細な事を。天にも地にもないものゝ様に心得て。安心し切て居るがわるいのじや。

横八　フーンなるほどそこへハ気がつかなんだはい。それならどうも老人が。此新板事をチョットわる口いひ過したはいノヲ。

正兵衛　それじやから此学問をする人ハ。何もあながち元ト学んだ事を捨ずとも。時代の御蔭て新しい学問へ。一ト足ふミこんだと心得て。世間一統に知れ渡つた事ハ。取用ひねバならぬと思ふとさへ居れバよいのじや。

横八　フーン爾しいかなおまへでも。これハ訖度一杯味噌をつけたはい。此学問をする人が。元ト学んだ事をミな捨てしまふたでないか。其訳ハ以前一統になつて居る説に逆ふて。同じ「ストルム」の中で。時にハ「レンセン」し。時にハ「ベイダラーイエン」せねバならぬ。といふて人をだまくらかすでないか。どうして一度にとつちもほんとうであらう筈がない。そして昔の法ハ……

正兵衛　だまれ横八。其昔の法が。何にもとづいた事か。なんぞ乞度した書物にでも書てある事か。そして其書物に何故にそうほかにハ扱はれず。他に仕様ハないといふ説き明しでもある事か。

横八　（暫く小首かたむけて考へしが）イヤ／＼「ホルスビュルフ」【人名】が。自分に著した「ゼーマンスギッツ」【書名】の中に。自分に和蘭領東印度渡海船の船頭に成たといふ事が書てあつたが。他にハ何も得思ひ出さぬはいの。エーツト何やら別な本の中で。見た様にも思ふたれど。今急にヤレソリヤといふて。トント思ひ出されぬ。そして爾し其訳が書てあつたか知んてや。

正兵衛　マアそれハそれにしておいて。「ストルム」の「ウェット」を教へ。また信仰して其事を行ふ人ハ。貴様が習ふ気でさへあれバ。凡ての事を尋常の昼「ベステッキ」【昼の「ベステッキ」ハ中に就てたやすきもの】の通りに。誠に明かに説き明してきかせ。色々表からいひ裏からいふて。正しい人の打消す事の出来ぬ証拠や。慥な知らせ書を沢山見せるぞや。貴様のたつた今いふた言葉でいふてやらうが。此誠に明かな正しい混雑せず。算用前にキチと叶ふた事柄を打消すのハ。貴様が“間違”じや。

横八　ハー其証拠を見たなら。大きに面白ろからふ。

正兵衛　貴様がきく気でさへあれバ。直にいふてきかせられる事じやが。爾し五郎吉や梶助もきゝたいであらふから。ミな揃ふた時にしよう。そしておれの話しの中に。なんでもわからぬ事があつたなら。話の間でもかまはず。直に尋ねて貰ふぞや。

横八　をまへ自分からそんな事をいひ出して。跡でこまるまいぞや。

正兵衛　なんのこまりハせぬ。貴様が議論好きの上に。自分になんぞ考へ違ひでもすると。尚もつて人に物をいはせぬ事ハ承知して居るハ。爾し五郎吉ハ随分をれによく物を問ふけれど。貴様達の中でハ怨れて遠慮して居る。梶助ハまた随分控へずと。をれの話しへ横矢を入れるが。いづれ彼れ等にも。よく教てやらねバならぬ。そして横八貴様ハ。古い友達じやによつて深切づゝでいふが。物事に若いものより余り早呑込ミをせぬ様にして。若いものゝ問た事でも。やはり益にたつ事があるから。気をつけてきくがよいぞや。

横八　それハ実におまへのいはつしやる通りじや。それなら大事なくバ。明日の朝第十時にまたこゝへ来う。

正兵衛　ヨシ／＼。をれも早う来て待て居よう。

第二回　名義を詳にす

（以下、略）



伊藤慎蔵生誕２００年記念



※

※ 伊藤慎蔵自署
（「藤野升八郎宛伊藤慎蔵書状 12 月 14 日付書状」より）

当資料は、令和 7 年 5 月 27 日から 6 月 8 日まで、適塾特別展示「シリーズ生誕 200 年記念～その四　大村益次郎・伊藤慎蔵・箕作秋坪」（大阪大学適塾記念センター）で展示しています。